

英語語法文法学会

第16回大会資料

日時：2008年10月18日(土)

開催地：静岡県立大学 一般教育棟

住所：〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1
<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>

- 徒歩の場合：JR「草薙駅」下車、徒歩15分
（「草薙駅」まではJR「静岡駅」より
JR東海道線（普通）7分）
- バスの場合：JR「草薙駅」前より静鉄バス「草薙団地行き」へ乗車、
「県立大学前」下車（所要時間3分）

英語語法文法学会
The Society of English Grammar & Usage

September 2008

英語語法文法学会

第 16 回大会プログラム

(会費 4,000 円 当日会費 1,500 円 予稿集 500 円)

日時： 2008 年 10 月 18 日 (土) <昼食は学内の食堂は利用できません。駅周辺での購入をお勧めします>

開催地： 静岡県立大学 一般教育棟

住所： 〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1

http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

(JR「草薙駅」下車、徒歩 15 分 (「草薙駅」までは JR「静岡駅」より JR 東海道線 (普通) 7 分)。あるいは、JR「草薙駅」前より静鉄バス「草薙団地行き」へ乗車、「県立大学前」下車 (所要時間 3 分))

開催校委員： 坪本篤朗・武田修一 Tel 054-264-5354

ワークショップ (一般教育棟 1 階 2103 講義室) ● 研究発表 (一般教育棟 1 階 2106・2107 講義室) ● 総会 (2103 講義室) ● シンポジウム (2103 講義室) ● 会員休憩室 (2108 講義室) ● 司会者控え室 (2105 講義室) ● 関係者 (ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者) 控え室 (2109 講義室) ● 書籍展示 (カレッジホール) ● 運営委員会室・大会本部 (一般教育棟 2 階 2217 講義室)

受付： 10 時より 一般教育棟 カレッジホール

ワークショップ (一般教育棟 1 階 2103 講義室) 10.20 - 12.00

司会 中山 仁 (福島県立医科大学)

1. 「状態事象の現在完了形について」 傳 建良 (関西学院大学大学院)
2. 「not so much A as B 構文とその派生形について」 長久保礼一 (名古屋大学大学院)
3. 「義務的前置詞句を取る英語の中間構文」 松家由美子 (東北大学大学院)
4. 「no と共起する比較級と「クジラの公式」について」 明日誠一 (青山学院大学非常勤)
5. 「The Two Verbs Leave」 出水孝典 (神戸学院大学准教授)
6. 「Get married with の容認性」 廣江 顕 (尚綱大学准教授)

受付：12時30分より 一般教育棟 カレッジホール

研究発表 13.00 - 14.45

第1室（一般教育棟1階 2106講義室） 司会 小泉 直（愛知教育大学）

1. 13.00 -13.35 「Way 構文に生起する One's way の意味機能について」
吉川裕介（京都外国語大学大学院）
2. 13.35 -14.10 「“one and one's NP”構文：Envy を中心に」
松元豊子（神戸市外国語大学大学院）
3. 14.10 -14.45 「The trees sang with birds 型表現の意味分析と使用実態」
金子輝美（愛知淑徳大学非常勤）

第2室（一般教育棟1階 2107講義室） 司会 大竹芳夫（新潟大学）

1. 13.00 -13.35 「補文標識 that の有無と動詞の意味解釈—doubt と suspect に
焦点をあてて—」 土屋知洋（関西学院大学大学院研究員）
2. 13.35 -14.10 「法表現 be bound to の意味論的考察」
衛藤圭一（京都外国語大学非常勤）
3. 14.10 -14.45 「事象命題と主述命題」 一條祐哉（日本大学）

総会（一般教育棟1階 2103講義室） 15.00 - 15.20

- 開会の辞 会長 安井 泉（筑波大学）
- 開催校代表挨拶 学部長 八木公生（静岡県立大学国際関係学部長）
- 学会賞選考報告 会長 安井 泉（筑波大学）
- 事務局報告 事務局長 吉良文孝（日本大学）

シンポジウム（一般教育棟1階 2103講義室） 15.35 - 17.45

- テーマ 「前置詞の意味を考える」 司会 和田四郎（神戸市外国語大学）
「前置詞 to と in の意味的相違」 講師 和田四郎（神戸市外国語大学）
「前置詞 for の意味—to の意味と対比して—」 講師 嶋田裕司（群馬県立女子大学）
「前置詞句主語の認可条件について」 講師 松原史典（高知大学）
コメンテーター 中右 実（麗澤大学）

閉会の辞 坪本篤朗（静岡県立大学）

懇親会 18.00 -19.30 会場：学生ホール（懇親会費：一般4,000円 学生2,000円）

連絡先：英語語法文法学会事務局

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部英文学科 吉良研究室内）

Tel 03-5317-9709 Fax 03-5317-9336 email: kira@chs.nihon-u.ac.jp

ワークショップ（一般教育棟 1 階 2103 講義室） 10. 20 - 12. 00

司会 中山 仁（福島県立医科大学）

状態事象の現在完了形について

傅 建良（関西学院大学大学院）

本発表では状態事象の現在完了形について考察する。同じ状態事象の現在完了形であるが、例(1)は容認されなく、(2)は容認される。

(1) *The door has been wooden. (Klein1992: 540、下線は発表者、以下同)

(2) The house has been empty for ages. (Leech 1994: 36)

また、状態事象の現在完了形には、(2)のような“state-up-to-the-present”用法のほかに、(3)と(4)のような“indefinite”を表わす例もしばしば見られる。

(3) Mr. Whorf has been our sales representative. (Declerck 2006: 228)

(4) Have you ever been to Greece? (Declerck 2006: 248)

同じ状態事象でも現在完了形をとるかどうか、また現在完了形をとった節 (clause) の意味について明らかに差異が見られる。状態事象とされたものにはそれぞれ異なったアスペクト性を持っているのだろうと考えられる。本発表では次の問題を解決しようと試みる。①アスペクト性に基づき、状態事象をどのように再分類できるのか。②状態事象が現在完了をとる際の制約は何なのか。③状態事象が現在完了形をとった節はどのような意味を持っているのか。

not so much A as B 構文とその派生形について

長久保礼一（名古屋大学大学院）

本発表では、相関詞 not so much A as B の表現を取り上げ、相関語句が as だけでなく、but、but rather (例文(1))、more、rather も生起する言語事実から意味的、統語的特徴を述べる。

(1) So, it is not so much the university entrance exams that dictate the form and content of high school education but rather high school and juku teachers who demand or expect face validity. (*The Daily Yomiuri*, 2008/04/01 by Mike Guest)

まず、この構文が語法書でどのように記述されているのかを概観する。その後、WordbanksOnline Corpus を用いてそれぞれの用例を抽出する。各々の表現に地域差、サブコーパス間で違いがあるかを調査する。not so much A as B は比較構文と

いうより否定構文としての意味が強いため、not A but B の類推により but B あるいは but rather B が使用されることを(2)のような他の否定構文と並行して述べる。

(2) You've no sooner found a new one and tried it but ten more pop up on the shelves. (WordbanksOnline, ukmags0051)

最後に、相関語句間の「近さ」がどのように関与しているのかを論じる。

義務的前置詞句を取る英語の中間構文

松家由美子（東北大学大学院）

英語では他動詞が自動詞として使われる例に中間構文があり、そこでは他動詞文の目的語が自動詞文の主語に生じる。これには、The orange peels easily.のような典型例のほかに前置詞句を義務的に伴う This computer plugs into a data bank./The rack screws on the wall.や Eight divides by two./Two divides into eight.のような自動詞文も該当する。これらの前置詞句付き中間構文をなす動詞は、共起する前置詞句に応じて動詞の意味が変わり、前置詞句を除去すると非文となる。本発表では、この種の例文に焦点をあて、中間構文をなす他動詞には本来は付加詞の前置詞句を義務的に取るものがあり、中間構文として主語の責任性や特性を表すためには、これらの動詞に前置詞句が持つ意味を補わなければならないことを論じる。動詞単独では中間構文の意味に特徴的な主語名詞句の責任性や特性を表すことが出来ない場合は、前置詞句が責任性や特性の意味の一部を表し、これらの前置詞句付きの動詞は中間構文の分類を拡張する例であることを述べる。

no と共起する比較級と「クジラの公式」について

明日誠一（青山学院大学非常勤）

いわゆる「クジラの公式」と「no+比較級」の解釈について再考する。例えば、(1)の下線部は構造的に多義的で、(i)more は no と結びつきが強い(=「クジラの公式」)、(ii)more は effective と結びつきが強い(=「no+比較級」)、の二通りの解釈を許すのだろうか。また、(ii)の分析が正しいとした場合、下線部の意味は“as (in)effective as”と理解して正しいのだろうか。

(1) A new study of prescription antidepressants published this week suggests the drugs may be no more effective than placebo in treating the most common forms

of depression. (Medical Marketing & Media Feb.27, 2008)

実際には、(1)の下線部に見るような表現は、(i)構造が「no+比較級」である、(ii)“The drugs are more effective than placebo.”というような「想定や認識」が結果的に否定されることを示す場合に選択される、(iia)no は“not”を意味し、例えば、「effective という概念の及ぶ範囲が placebo を超え『ない』」ことを表す、(iib)「超え『ない』」というのは、多くの場合、「多少の差があるという認識がある一方で、その差が無視できる程度であると話者が判断している」ことを表す。(1)の下線部に即して端的に言えば、「placebo は、effective の『程度』について理解するときの『目安』として引き合いに出されている」。

The Two Verbs Leave

出水孝典（神戸学院大学）

本発表では、中心義 to go away from a place を表している動詞 leave を取り上げて論じる。論点は2つで、leave には arrive の反意語として機能する場合だけでなく enter の反意語として機能する場合もあることを示すことと、なぜそのような2つの用法が存在するのかを動詞の語彙意味論的見地から説明することである。

多くの語彙意味論的研究、辞書、シソーラスでは、leave の反意語が arrive だとされているが、enter を反意語として挙げているものも見られる。実例を観察しても、From that time on, a series of men constantly arrived and *left*. のように leave が arrive と対照されている例が見られる一方で、Then I want a complete list of everybody who's entered and *left* the property tonight. のように leave が enter と対照された例も散見されるので、leave は arrive だけでなく enter の反意語としても用いられることが明らかである。では、どうして leave はこのように2通りの使い方をするのか。この疑問を解決するために、本発表では、語彙意味論的研究で leave やその類義語・反意語がどのように論じられているのかを概観し、それらの意味特徴を把握した上で、leave の語義拡張が生じた仕組みと動機付けを明らかにする。

Marry with / Get married with の容認性

廣江 顕（尚綱大学）

学校文法や標準英語では、以下(1)に例示されているように、日本語の「結婚する」に相当する marry あるいは get married は前置詞 with を選択しないとする語法が一般的であった。

(1) a. She married (*with) a builder.

b. She got married to/*with her childhood sweetheart.

ところが、実際には、marry あるいは get married が with を選択しても容認する話者は少なくない。

(2) a. Is it allowed to marry with foreign muslim for omani girls?

b. get married with someone one's parents don't like

本発表では、前置詞 with が選択されても当該の文あるいは句が容認可能と判断される条件を可能な限り明らかにし、また、with が選択された文が実際の発話ではどのように聞こえるのかを出来るだけネイティブの直感に近い形で記述したい。

Way 構文に生起する one's way の意味機能について

吉川 裕介 (京都外国語大学大学院)

本発表の主眼は、(1)に示すような Way 構文に生起する疑似目的語(fake object)の one's way が、どのような語彙的意味をもち、どのような機能を果たしているのかを明らかにすることである。

(1)Bill belched his way out of the restaurant. (Jackendoff 1990)

(2)III [進路・方向・方面]

[通例 one's ~] 進路；進行、前進 (s.v. WAY 学習英和辞典)

Way 構文はこれまでに膨大な研究成果を蓄積しているが、one's way の語彙的意味や機能的側面に関してはほとんど指摘されておらず、動詞や構文から文法的に要求される機能語として捉えられてきた。

本発表では、Way 構文に生起する one's way の語彙的意味が(2)で示すような「進路」ではなく、「道程(journey)」である点を、幾つかの意味的・統語的テストや大規模コーパス、小説で用いられた例などを基に実証的に指摘する。また、Goldberg(1995)が主張する構文的意味の「困難性」が、なぜ Way 構文に内包されるのかという合成性(compositionality)の問題も、one's way の意味機能から適切に説明することができる点を論証する。

"One and one's NP"構造：動詞 *Envy* との関連性

松元 豊子 (神戸市外国語大学大学院)

Envy は従来二重目的語構文において"envy him his success"のような形式で用いられてきたが、最近特に若い人の間では次第にこの形式は使われなくなってきている。その理由は、Goldberg(1995) に記述されているように、この動詞が移動を含意せず、Recipient への移動を表す構文にはなじまなくなっているからである。

これに代わって"I envy his success"が高い頻度で用いられているが、"I envy him and his success"のように *and* を用いる例もかなり多く見受けられる。また、この

構文には、FrameNet の Experiencer_subject Frame に属する *envy*, *despise* や Judgment Frame の *admire*, *respect*, *blame* などの動詞が生起し、人称面でも生産的に使われていることがコーパス検索を通じて分かってきた。

Quirk(1985)は Nonsentences の一つとして同種の構造に言及している。本発表では、動詞 *envy* に "One and one's NP" 構造の後続を可能とする動機についてそれぞれの意味的な特性、及び接続詞 *and* の役割等を考察しながら論ずる。

The trees sang with birds 型表現の意味分析と使用実態

金子 輝美 (愛知淑徳大学非常勤)

(1) The trees sang with birds. (Levin 1993)

(2) The garden is swarming with bees.

「所格交替」あるいは「代換」現象として知られる(1),(2)に類する表現を対象とし、便宜上「さえずり」構文と呼ぶ。この構文は He sprayed the wall with paint. のような他動詞構文とともに一括して「壁塗り」構文の名のもとで説明されてきた。だが両者は完全に別個の構文である。別個に独自の視点からこの構文の特徴を追求したい。

①意味構造の分析： (1)を例にして説明する。「鳥たち」という実動体と「森」という静止体(場所)の間に概念的隣接性が存在することに注目すれば、「ターゲットが常に文中に明示された拡大メトニミー構文」であると言えないだろうか。

②「さえずり」構文の範囲と位置づけ： 一般性の高い大枠としての "X+V+with+Y" 構文は意味的に広い裾野をもち、そこには下位区分としての複数の特定構文が含まれる。当該構文はその一角を占めるが、他構文との境界線は截然としない場合がある。

③実例の観察と分析： 文脈を伴う実例を豊富に用意し、作者の情意を探る。「場所」を中心にして、「実動体」との関係が述語によって潤色された叙情表現である。

④構文の選択と動詞の意味： 「状態」を表わす非対格動詞しか使われないという記述は、果たして妥当であろうか。構文が選択され、その構文の中で動詞の意味が決定されるのである。細分化され、確定した動詞の意味が最初から存在するのではない。

補文標識 that の有無と動詞の意味解釈—doubt と suspect に焦点をあて—

土屋知洋 (関西学院大学大学院研究員)

本発表では、動詞 *doubt* と *suspect* の補文標識と意味解釈の関係を実証的に検証し、両動詞とも型の違いが意味解釈に影響を与えていることを論じる。また非断定動詞とされる *doubt* が肯定文で[ZERO](補文標識 *that* のない型)をとる要因を通時的に概観し類推がその要因であることを示す。

動詞 *suspect* と異なり、動詞 *doubt* に於ける型と意味との関係は文献・辞書間でも一貫性に欠ける。例えば、Greenbaum & Whitcut (1988: s.v. *doubt*)では型の相違が意味解釈に影響を与えていることを示すが、Huddleston & Pullum (2002: 984)では意味の違いを認めていない。更に、[ZERO]に関する意味研究は皆無に等しい。従って、本研究では特に動詞 *doubt* が従える3つの型 *whether* / [THAT] / [ZERO]と意味との関係を中心に議論を進め、両動詞の型と意味解釈との関係を提示する。

また非断定動詞は挿入句用法を持たず[ZERO]をとりにくい、動詞 *doubt* は[ZERO]を従える。この問題を通時的に概観すると、現代英語で *doubt* が[ZERO]をとるのは、一つに名詞の *no doubt* という断定表現への類推が関わっていることが考えられる。更に、動詞 *suspect* との相互影響(広い意味での類推)がもう一つの要因であると考え、このことで説明可能であると提案する。

法表現 *be bound to* の意味論的考察

衛藤圭一 (京都外国語大学非常勤講師)

本研究は、意味論の立場から、*be bound to* の各先行研究と辞書記述を比較・精査し、実際の使用例を観察することで、その意味と用法を正確に記述することを試みるものであり、以下の3つの点を取りあげている。まず、*be bound to* は認識的意味において *must* よりも強い意味を表すとされるが、Declerck (1991) の示す例を見ると、両者は交換しても問題ないと考えられるものがある。そこで、本研究ではどのような場合に交換可能なのかを検討している。また、先行研究では「使用頻度がまれである」という点で意見が一致しているが、中には約40年前のデータに基づくものもあることから、その全てが現代英語の実態を反映しているとは言い難い。この点については、約40年前と今日のコーパスでの使用頻度を調べる

必要があると言える。最後に、Coates (1983) は、be bound to は話しことばよりも書きことばで用いられると述べているが、COBUILD 第 5 版は認識的意味の定義に話しことば(SPOKEN)のラベルをつけている。もしこれが正しいとすると、Coates の主張は間違いということになるが、本研究では、辞書記述とコーパスデータから、話しことばと書きことばでは、どのような意味的差異が見られるのかを調査している。以上のことを踏まえ、これまで指摘されていない点を示すことにしたい。

事象命題と主述命題

一條 祐哉（日本大学）

アスペクト的に分析する場合、一般的に、命題（動詞、述語）は押しなべて state, activity, achievement, accomplishment などのように Vendler(1967)流に分類される。ただ、ここでいうアスペクトというものが、時間の変化とともに事態がどのように変化するのかということの問題にするとすれば、これによって分類することできるのは、動的な時間軸上に存在する「事象」を表す命題である。ところが、すべての命題が事象を表すとは限らない。例えば He is rich は、アスペクト分析において、時間が経過しても無変化ということから、state と分類されるかもしれない。しかし、このような文が果たして時間の変化と事態の変化の関係によって記述できるような命題、すなわち事象を表す命題であるのだろうか。

そこで本発表では、命題は、まず時間の変化と事態の変化の関係によって記述されうる「事象命題」と、そうでない「主述命題」とに分かれ、そのあとで、前者が state や activity などのように分類されると考える。そして、この事象命題と主述命題という区別が、形式的分類ではなく意味論的分類であり、また様々な言語現象の意味構造を分析するのに有効であるため、意味論研究において、必要な概念であるということを提案する。

〈シンポジウム〉（一般教育棟 1階 2103 講義室） 15. 35 - 17. 45

テーマ 「前置詞の意味を考える」

司会 和田四郎（神戸市外国語大学）

英語に前置詞という語類が存在することは誰も認める事実である。しかし、その定義づけは未だに行われてはいない。前置詞に関する文献が決して少なくはないことを見るとこれは一見奇妙なことに思われるが、そのほとんどにおいて前置詞について明確な概念規定が行われないままに議論がなされているといっても過言ではない。

個々の前置詞はそれほど多様性を極め、混沌状態にあるかのような印象を与える。Symposium ではこの状態は前置詞それ自身の意味に対する分析的考察が十分ではないことに起因すると想定し、従来の前置詞論の問題点は何か、前置詞の意味をどのように考えるべきなのかというやや原理的な問題を考えてみたい。

まず司会者からこれまでの前置詞論の特徴と問題点が指摘され、前置詞はいくつかの類に分類すべきであることが提案される。

次に嶋田講師からは、前置詞自体の意味をどのように考えるべきかという視点から *for* と *to* の相違に関する研究が紹介され、松原講師からは前置詞の意味を考える上で重要な示唆を提供すると思われる前置詞句主語文について、その統語的及び意味的認可条件に関する研究が報告される。

最後に中右講師からそれぞれの研究報告及び全体的な前置詞論に関するコメントが加えられる。

前置詞 *to* と *in* の意味的相違

和田 四郎（神戸市外国語大学）

これまでの前置詞論では、個々の成員の特性についてほとんど考慮されることはなく、すべての前置詞が同じ土俵の上で議論がなされていた。前置詞に関する定義が不可能であるという現状はこのことと無関係ではない。

しかし前置詞をいくつかの角度から検討するとそれらが決して一枚岩ではないことが分かる。例えば、形態的にも単音節の語から、2音節、3音節、4音節の語などがあり、さらに、2語あるいは3語からなる語群も前置詞として分類される。また前置詞は「場所」や「時間」等を表すとされるが、それらの意味が必ず

しもすべての前置詞を特徴づけるわけではなく、機能的にも前置詞句は必ずしも他の要素を修飾する機能を有するとは限らない。

以上のことを例示した後、発表では単音節の前置詞の分析を行う。具体的には to と in を取り上げ、両者の意味的あるいは統語的ふるまい等を検討した結果、この二つは根本的に異なる意味構造を持ち、単音節の前置詞は質的あるいは意味的に異なるいくつかのレベルを形成していることを示す。

最後に、前置詞は「関係」を表すと一般的に考えられている。しかし、この「関係」とは何かなどその具体的な中身についてはほとんど言及されることはない。取り上げる to と in の分析は前置詞が有する関係概念の解明にも示唆を与えることを述べる。

前置詞 for の意味—to の意味と対比して—

嶋田 裕司 (群馬県立女子大学)

本発表の目的は、前置詞 for の本質的意味が方向を表す空間的図式であることを示すことにある。その際、よく似た図式の前置詞 to と対比することにより、for の意味を際立たせる。

for の使用法については、従来、その本質を「意図」や「目的」として語ることが一般に行われてきた。学習辞典においては、for の記述が「人に与える意図」(I've got a present for you.)などから始まるのが普通である(LDCE3)。また、解説書・研究書の中には、for は空間関係を表さないと明言するもの、for の中心的意味要素として「目的」を認めるものがある(Lindstromberg (1997), Tyler and Evans (2003))。すなわち、for の本質的意味は、to とは異なり、空間的方向ではないと考えることが、OED 以来の伝統であると思われる。

しかしながら、for 自体は、to と同様に、空間を背景とする方向を表す。「意図」「目的」は文中での解釈である。for に対して to とは異なる適切な空間を設定すれば、2 つは共に方向を表す図式となり、その相違点は明瞭となる。

しかも、この考え方は、前置詞がそれぞれ独自の空間を選択し、その中に区域または方向を指定するという仮説に一致するものである。

前置詞句主語の認可条件について

松原 史典 (高知大学)

(1a-b)が示すように、前置詞句(PP)が主語として現れる場合がある。

(1) a. [After dinner] seems to suit her fine.

b. John considers [under the bed] (to be) a good hiding place.

しかしながら、(1a-b)の PP 主語はどのような環境でも許されるわけではない。

(2) a. *[After dinner] makes John sleepy.

b. *John expected [under the bed] to please the cat.

また、どのような PP 主語でも主語位置に生起できるわけではない。

(3) a. *[In my opinion] is easy to see.

b. *I regard [for Dale] as a terrific recipient of this purchase.

そこで、本発表では、先行研究を考察し、PP 主語が認可される統語的条件と意味的条件を検証する。また、こうした主語の統語範疇や格付与についても言及する。関連して、(4)に見られるような埋め込み文内の PP 主語と that 節主語の生起可能性の相違について説明を試みたい。

(4) a. They considered [in the garage] (to be) the best place to meet.

b. *They considered [that Bill was a fool] (to be) obvious.